

【巻頭言】

○→◎・×→△:改良・改善だけでなく保護・保全も Positive Assist and Negative Correct

「空を見上げると、ソーシャル・イノベーションと掲げられているまちがある。」正確な表現ではないものの、日本ソーシャル・イノベーション学会による催しの際、このような言葉で幕が上がる場合があります。このように参加者に呼びかけるのは決まって今里滋・代表理事です。そして、そのまちとは大阪市のことで、通天閣に「社会イノベーションの日立」というLED・ネオン広告が掲出されているためです。

日立の関西支社によれば、通天閣では開業の翌年である1957年7月22日から日立がネオン広告を掲出しているとのことでした。

(<https://www.hitachi.co.jp/about/corporate/area/kansai/activity/publicity/tutenkaku/index.html>)。その内容は「時代に即したメッセージや文言等を掲げていくこととされています。

(http://www.hitachi.co.jp/about/publicity/ad_outdoor/tsutenkaku_60th/history.html) 2017年2月10日に掲出された「社会イノベーションの日立」の文言は14代目の広告で、2011年10月までは「安心と信頼の日立グループ」とあった通天閣南面の文面がリニューアルされたものです。

(http://www.hitachi.co.jp/about/publicity/ad_outdoor/tsutenkaku_60th/upgrade.html) 逆に言えば、2011年からは社会イノベーションが、すなわちソーシャル・イノベーションが、時代に即したメッセージとして響くものと判断された、と捉えられます。

2006年に日本で初めてソーシャル・イノベーションを掲げた同志社大学大学院総合政策科学研究科のメンバーが中心となり、日本ソーシャル・イノベーション学会は設立されました。2018年の設立準備大会を経て、2019年には第1回の年次大会が開催され、2020年に学会誌である「ソーシャル・イノベーション研究」の発刊に至りました。コロナ禍も相まって、当初の刊行予定の期日を延ばさせていただいたことから、幅広い論考を収めることができました。創刊号は日本ソーシャル・イノベーション学会の理事を中心とする構成ですが、今後は幅広く投稿を受け付け、理論的・実践的な議論が深められていくことを期待しています。

ここで創刊号の概要を紹介させていただきます。特集「ひとりの夢から未来をつくる」は、設立準備大会の折に掲げられたテーマをここ

でも用いることとし、今里滋・代表理事による日本ソーシャル・イノベーション学会設立の舞台裏、新川達郎・代表理事による日本ソーシャル・イノベーション学会が果たすべき役割、そして2019年5月19日に開催された日本ソーシャル・イノベーション学会春季セミナーで話題提供をいただいた岡山大学の青尾謙先生にソーシャル・イノベーションに関する世界動向をお示しいただきました。そして研究論文では、佐野淳也理事に住民主体の地域活性化のプロセスを、宗田勝也理事に多文化共生社会の維持・発展に必要なモデルの検討を、浅井俊子理事に英国発祥のImpactHubの京都での展開とその可能性を、それぞれ論じていただきました。加えて、研究ノートでは西村仁志理事に米国・カリフォルニア大学サンタクルーズ校に滞在された学外研究の成果を、実践活動報告では本多幸子理事に2つの博士の学位を取得した後のソーシャル・イノベーションの実践を、それぞれお示しいただきました。

学術団体が発行する刊行物ということもあって、執筆や査読に関する取り決めも定めた上での第1号の刊行です。その際、どうしてソーシャル・イノベーションを掲げているからには、何か工夫をしたいと思案も重ねました。ただし、まずは学会誌としての基盤を固めることが大切であろう、と、編集委員が所属する団体・機関の学術雑誌や研究紀要をもとにして枠組みを整えた結果、このような創刊号としてまとめられました。一つ、積極的に選択をした事柄としては、紙媒体の刊行は差し控え、オンラインのみで発行する、ということでした。

守破離という言葉があります。茶道や武道の世界で用いられてきたもので、日本の芸事の創造・発展を下支えした思想であるとされています。この思想を創刊号の巻頭言で借りるのは単なる非常識との指摘をいただきそうですが、型破りというのは、型がわかっている人が、その枠組みを超えることに意味があります。したがって、ソーシャル・イノベティブな学会および学会誌を目指すにあたっては、まずは既存の型を学び、守っていくことから始めてみた、という具合です。

ただ、既存の学術雑誌の中でも、型破りなものが刊行されてきています。例えば、1998年に

日本グループ・ダイナミクス学会による「実験社会心理学研究」の38巻2号の特集「地域医療とグループ・ダイナミクス」に収められた「住民の中へ 住民と共に」(早川, 1998)をその一例としてあげることができます。具体的には、わたくし・私・ボク・ぼく・わたしなど一人称で記され、体言止めも多用され、キャプションが添えられていない手書きのスケッチが収められ、最後は「耳をろうする 蝉しぐれの中で」と結ばれており、加えて本文には直接の引用箇所がない文献リストに並べられている5冊の著書は全てご自身の著書でした。もちろん、こうした論文を収めたのは狙いがあったことであり、特集を担当した編集委員(杉万俊夫・京都大学教授/当時)によれば、50年にわたって京都・西陣界隈の住民主体の医療の担い手としての早川一光医師の「叫び」を「当事者の赤裸々な言説」として提示した上で、続く2つの論文により理論的な分析を通じた実践の抽象化と別のフィールドでの実践的研究との対比を行うことで、「地域医療をめぐる人間科学の現場を、特集の形で表現しようと試みた」と記されています(杉万, 1998, p.203)。

今回の巻頭言ではタイトルに記号を用いる

というささやかな工夫を重ねてみたのですが、今後、号を重ねていくことで、本誌の特集でも、あるいは論文・研究ノート・実践活動報告・書評で、さらには新たなカテゴリーの設置によって、ソーシャル・イノベーティブな学会誌のあり方が探究されていくことを願っています。何より、ソーシャル・イノベーションの実現においては、誰かが雄弁に語るのではなく、些細な行動であってもその継続や蓄積や伝播によって社会が大きく変わることもあります。定型俳句に対して自由律俳句があるように、またかつてフォト・ジャーナリストたちが社会システムへの批判や問題提起を行ったように、表現の型を巡る新たな挑戦を受け入れることも、ソーシャル・イノベーションを掲げた本誌の使命の1つでしょう。そんな、ソーシャル・イノベーション道のスタート地点を定めることができれば幸いです。

<第1号編集・査読委員(○:編集長)>

- 山口洋典(立命館大学)
- 宗田勝也(総合地球環境学研究所)
- 新川達郎(同志社大学)
- 西村仁志(広島修道大学)

引用文献

早川一光(1998)「住民の中へ住民と共に: 町衆の医療」『実験社会心理学研究』38(2): 205-214。

杉万俊夫(1998)「実践としてのグループ・ダイナミクス」『実験社会心理学研究』38(2): 202-204。